平成25年度　埼玉古墳群範囲確認調査の報告

堀口智彦

1．これまでの確認調査と今回の目的（図１）

さきたま史跡の博物館では、史跡埼玉古墳群の指定範囲や価値、遺跡全体としての埼玉古墳群の範囲や性格を確認するため、平成19年度から確認調査を実施している。

平成19年度は、史跡指定範囲の南から南西側にかけての３地点でトレンチ調査を行った。史跡指定範囲の南端付近にあたる奥の山古墳の南西の２地点（H19－A、H19－B１～５）では、H19－B５で近世以降の溝を１条検出した。また、この２地点で確認した関東ローム層の標高から、台地が西に向かって下がっていき、奥の山古墳が築造される台地とは１m程度の高低差があることが分かった（西口2009）。

この周辺では、平成21年度にも古墳伝承地の確認などの目的で調査を行っている。この調査では、近現代の水路と考えられる溝と、古墳時代前期のものと思われる壺形土器片が出土している。また、全トレンチで確認した関東ローム層の標高と、発掘調査で確認した奥の山古墳下の関東ローム層の状況から（佐藤2014）、この地点は大型古墳が築造される台地の高い部分からは低くなるものの、連続したローム台地であることを再確認した（佐藤2011）。

平成20年度には、史跡指定範囲北半の東側を中心として調査を行った。調査の結果将軍山古墳東側の内堀・外堀を確認し、近世以降の溝を２条、８世紀以降の溝を１条検出した。近世以降の溝からは陶磁器が出土し、８世紀以降の溝からは南比企産の土師器坏・産地不明の平瓦片が出土している。また、関東ローム層の状況から、指定範囲北半の東側では、稲荷山古墳の東側で地形的に低くなる傾向があり、H20－９トレンチ付近に地形上の変換点があることが分かった。この変換点を境界にして、史跡指定範囲北半の東側には古墳がないと考えている（西口・佐藤2010）。

これまでの調査では古代から近世の遺構が検出されているが、古墳時代の遺構は見つかっていない。一方で、遺跡が立地する地形については、平成19年度から21年度の調査成果から史跡指定範囲の東西で地形の変換点が確認され、これが大型古墳の分布範囲の境界となっていると推測できる。ただし、地形の変換点の確認はローム層においてであり、古墳時代の状況は不明である。

また、これまで史跡指定範囲の南側で実施した調査では、用地買収が進んでいなかったことなどにより調査が可能な箇所が限られており、遺構の分布を見逃している可能性がある。このため、今回の調査では調査の空白域を埋め、古墳などの遺構の分布の具体的な状況を確認することを目的とし、過去に調査が行えなかった地点において調査を行った。

2．調査の概要　ー期間・位置・方法などー

（１）期　間

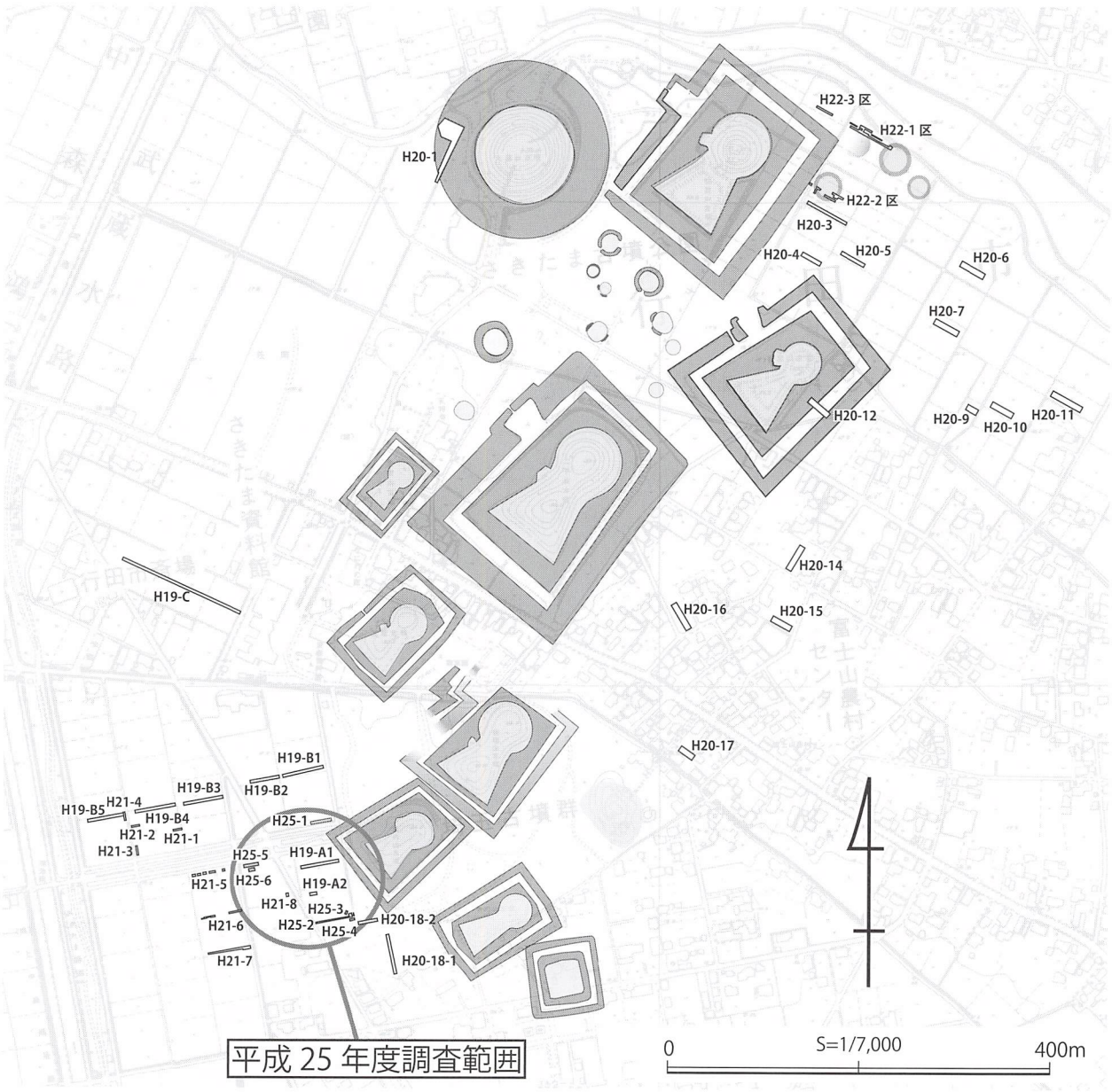


図１　平成19年度から25年度の確認調査実施位置

平成26年２月６日から平成26年３月19日のうち11日間
（２月６日、７日、25日、26日、３月６日、７日、11日、12日、17日、18日、19日）

（２）調査地の地番
埼玉県行田市大字渡柳1383－１、1384－１、1394、1416－１

（３）調査主体と組織
調査主体：埼玉県立さきたま史跡の博物館
調査組織：館　長　　浅野晴樹
　　副館長　　鈴木　進

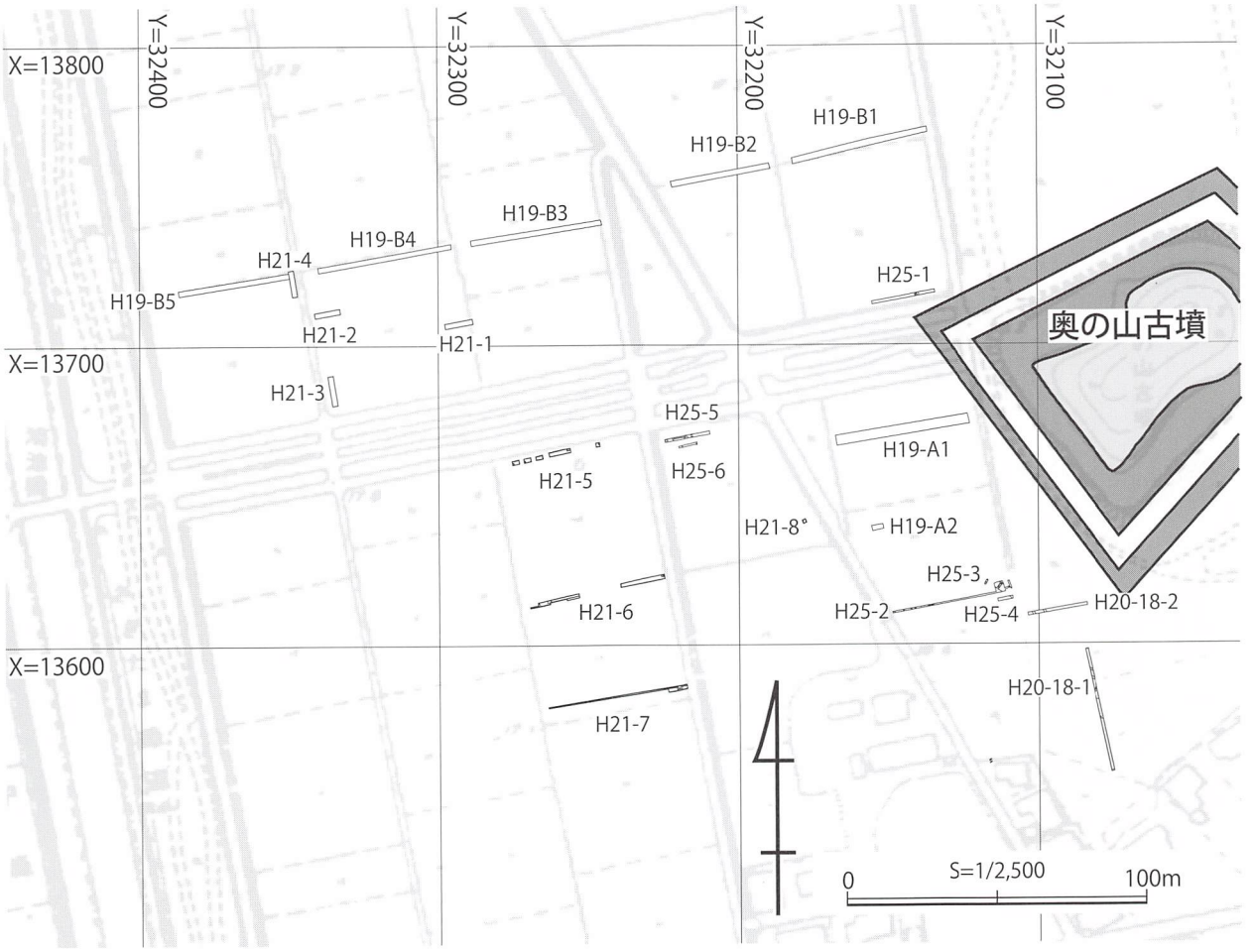


図２　奥の山古墳西側における確認調査実施箇所

主席学芸主幹	鈴木秀雄
史跡整備担当主任学芸員	岩田明広
史跡整備担当主任学芸員	佐藤康二
史跡整備担当学芸員	堀口智彦（調査担当者）

（４）調査対象地について

埼玉古墳群の史跡指定範囲の南側（奥の山古墳南西）で、現況の地形では大型古墳が築造された台地の高い部分と、そこから南西に向けて落ち込む部分の境界付近にあたる。調査箇所については、史跡埼玉古墳群保存整備協議会に諮り、平成25年12月27日に承認を受けた。

（５）調査方法

①調査区の設定箇所と目的（図２・３）

埼玉古墳群の南側では、前述のとおり平成19年度から平成21年度まで確認調査を行っている。今回の調査区は、これらの空白域であり、台地の高い部分と低い部分の両方の状況を確認できる３箇所に設定した。東側のトレンチ１から４は台地の高い部分、西側のトレンチ５・６は低い部分となる。

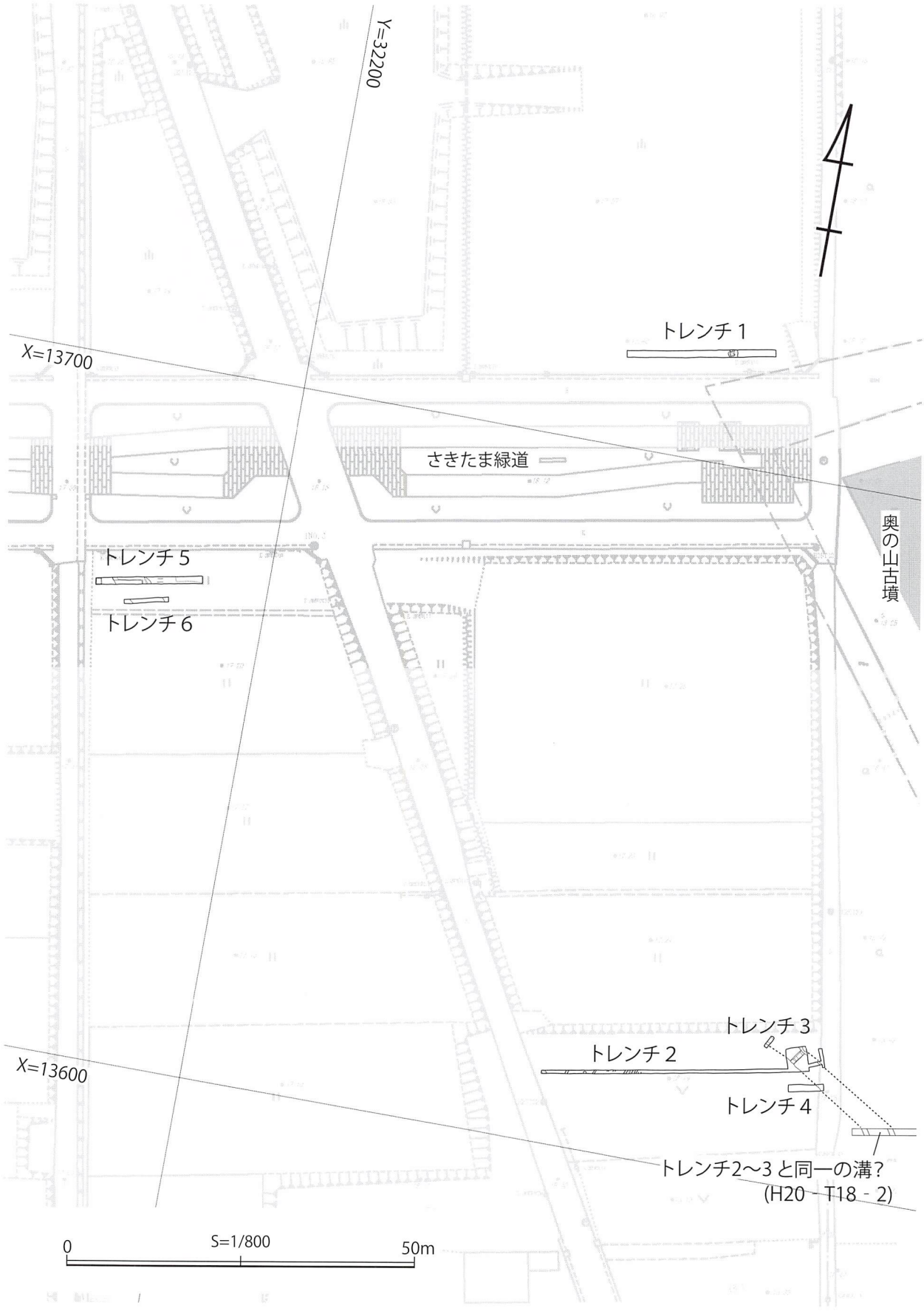


図3　平成25年度調査範囲の全測図

各調査区においては、遺構の有無と旧地形の状況を確認することを目的に、幅50㎝～１ｍのトレンチでの調査を計画した。

②測　量

測量にあたっては、行田県土整備事務所が公園用地の測量のため平成25年度に設置した３級、４級の基準点・水準点を使用した。既設の点から離れた地点については、任意の点にベンチマークを設置した。

平面図・断面図はトレンチの周囲に任意のポイントを設定し、それを基準に作成した。その後、GPSを用いたトレンチ周辺の測量を業務委託し、世界測地系による座標を定めている。

③遺構の掘削と遺物の取り上げ

今回の調査においては人力で掘削を行った。表土層から層序に従い掘削していき、遺構が確認できない場合は順次掘り下げて、ハードロームの上面まで掘削した。

また、検出した遺構は必要に応じ覆土の掘削を行った。出土した陶器片、須恵器片などの遺物は層位ごとに取り上げたが、確実に遺構に伴う遺物は出土していない。

（６）調査日誌

２月６日　用具の準備。
　　トレンチ１、トレンチ２、トレンチ５を設定。
　　トレンチ１の掘削を開始する。作業員12名

２月７日　トレンチ１、トレンチ５の掘削。作業員11名

（２月８日から24日まで、大雪の影響により調査を実施できず）

２月25日　トレンチ２の掘削を開始。トレンチ１・５は冠水のため調査できず。
　　トレンチ２の東端で溝を検出する。サブトレンチを設ける。作業員13名

２月26日　トレンチ２・５の掘削。
　　トレンチ３・４を掘削し、断面図・平面図を作成する。作業員11名

（３月１日　調査担当者のみ作業。トレンチ１・５の遺構確認。）

３月６日　トレンチ１・２・５・６の掘削。
　　トレンチ３・４の写真撮影。作業員10名

３月７日　トレンチ５の掘削。トレンチ２の遺構確認。トレンチ６平面図作成。
　　トレンチ２の西端で溝群を確認する。作業員12名

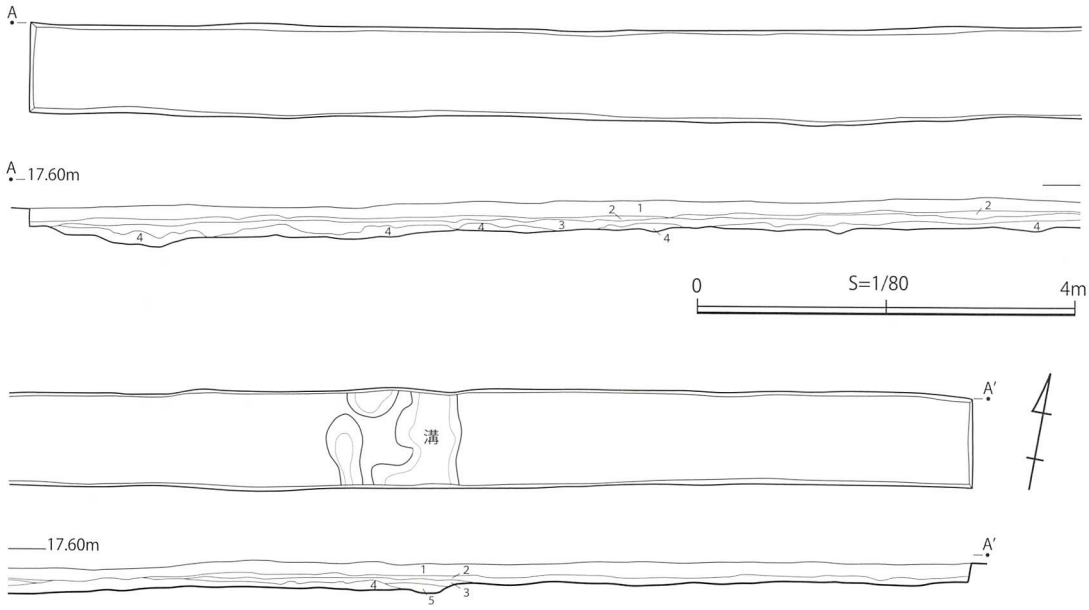
３月11日　トレンチ２東端溝サブトレンチの断面図作成。トレンチ２壁面で溝群を確認。
　　トレンチ５の西端で深掘りを行う。ＧＰＳ測量（業務委託）を実施。
　　作業員２名

３月12日　トレンチ２東端溝周辺の写真撮影。
　　トレンチ５の掘削。作業員２名

３月17日　トレンチ１写真撮影。断面図・平面図を作成。
　　トレンチ５の掘削。作業員４名

３月18日　トレンチ２・５・６写真撮影。トレンチ１埋戻し。

トレンチ１



トレンチ１　土層注記

1　シルト質細砂　暗褐色10YR3/4　ロームの細かな粒・As-Aを含む　現代の水田耕作土か
2　シルト質細砂　灰褐色10YR4/1　ロームの小さなブロック・As-Aを含む　還元しやや青味がかる
3　シルト質細砂　黒褐色10YR3/2　鉄斑・マンガン粒・As-Aを含む
4　シルト質細砂　黒褐色10YR3/1　ロームのブロック・マンガン粒・鉄斑含む　一部でハードロームの大きなブロックが黒褐色土と混ざる
5　シルト質細砂 極暗褐色10YR2/3　ハードロームのブロックを含む　溝状遺構の覆土

図４　トレンチ１　断面図・平面図

トレンチ２・５断面図・平面図作成。作業員14名

３月19日　トレンチ２・５写真撮影補足、及び断面図・平面図作成。

トレンチ埋戻し。作業員13名

３．平成25年度範囲確認調査の成果

（１）各トレンチの成果

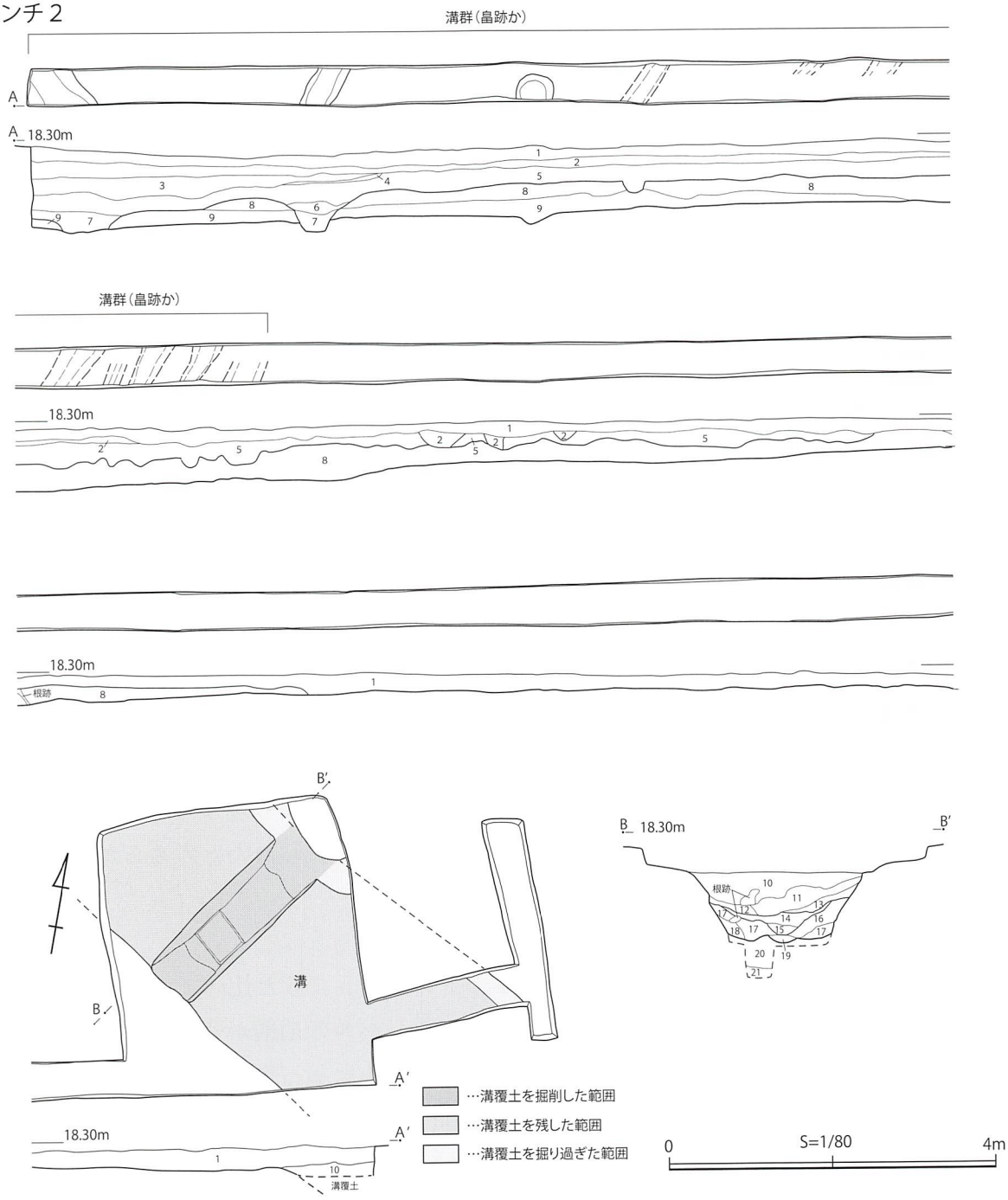
①トレンチ１（行田市大字渡柳1383－１、1384－１）（図４）

奥の山古墳の外堀に近く、外堤が検出される可能性も考えられた。トレンチは平面長方形で東西方向に設定し、幅1.0ｍ、長さ21.5ｍ、調査面積は21.5㎡である。現地表面での標高は、東端で17.5ｍ、西端で17.3ｍである。

トレンチ東側では0.2ｍほど掘り下げたところで、これまでの調査でロームと報告されている層と同一と考えられる黄褐色土の面に到達した。この層は硬くしまっており、細砂をやや多く含み粘性の強い細砂質シルトである。これまでの埼玉古墳群の調査や確認調査、今回のトレンチ５の層序から、いわゆる関東ローム層のハードロームと考えられる。検出レベルは西側に向けてわずかに深くなっていき、西端では深さ約0.4ｍを測る。

土層は最上層の１層が現代の水田耕作土に相当し、２層は還元され灰褐色を呈する。その下

トレンチ２



トレンチ２　A - A′土層注記

1	シルト質細砂	にぶい黄褐色10YR4/3	As-Aが含まれる　下層との境界が平坦になる
2	シルト質細砂	にぶい黄褐色10YR5/3	１層に似るがやや明るい　As-Aを含む　下層との境界が平坦になる
3	シルト質細砂	暗褐色10YR3/4	ロームの細かなブロックがわずかに入る　As-Bを含む
4	シルト質細砂	褐色10YR4/4	３層に似るが、客土と考えられる白色粘質土のブロックが入る
5	シルト質細砂	暗褐色10YR3/4	ロームの細かなブロックがわずかに入る　As-Bを含む 西側の溝群は全てこの層で埋まる
6	シルト質細砂	暗褐色10YR3/3	西側溝群のうち、他より深く掘られた溝の覆土の上層
7	シルト質細砂	暗褐色10YR3/3	溝の覆土　６層の下層　壁際には崩落したと思われるハードロームのブロックが入る
8	シルト質細砂	暗褐色10YR3/3	暗いオレンジ色の斑紋（鉄斑か）が入る　FAと考えられる細かな白色粒がやや含まれる トレンチ西側の溝群はこの層から掘り込まれている
9	シルト質細砂	黒褐色10YR2/3	８層より少ないが、暗いオレンジ色の斑紋が入る　ソフトローム

図５　トレンチ２　断面図・平面図

トレンチ２　B - B′土層注記

10	シルト質細砂	黒褐色 10YR2/3	ハードロームの細かなブロックを多く含む
11	シルト質細砂	暗褐色 10YR3/3	ハードロームのブロックをわずかに含む　しまりない
12	シルト質細砂	黒褐色 10YR2/3	ハードロームの細かなブロックを多く含む　しまりない 溝を掘りなおした後に崩落した土か
13	シルト質細砂	暗褐色 10YR3/4	ハードロームのブロックを多くに含む 12層と同様、掘りなおした溝への崩落土と思われる
14	シルト質細砂	黒褐色 10YR2/3	ハードロームのブロックをまばらに含む　堀を掘りなおした後に堆積した客土か
15	シルト質細砂	暗褐色 10YR3/3	ハードロームの細かなブロックを多く含む　やや粒が粗く、シャリシャリしている
16	シルト質細砂	暗褐色 10YR3/4	ハードロームの細かなブロックをわずかに含み、一部は大きなブロックになる 壁面からの崩落土が含まれると考えられる　腐植土がまばらに混じる
17	細砂質シルト	黒褐色 10YR2/2	ハードロームのブロックを多く含む　左右の壁面からの崩落土
18	細砂質シルト	暗褐色 10YR3/3	ハードロームのブロックを多く含む　壁面からの崩落土
19	シルト質細砂	暗褐色 10YR3/3	ハードロームのブロックを含む　溝の底に堆積した層で、硬くしまる
20	シルト質細砂	暗褐色 10YR3/3	溝の底を掘り抜き、深掘りを行った部分　黒色帯に対応するか
21	シルト質細砂	にぶい黄褐色 10YR4/3	深掘りした部分の下層　立川ロームのＸ層に対応するか　更に深くまで続くが掘削せず

層の３、４層には上層から浸透した鉄斑やマンガン粒がみられる。ハードロームの上層の１から５層内にはAs-Aのみが確認でき、As-Bなどは含まれていなかった。ソフトロームから中世頃までの堆積が失われ、近世頃以降の層のみが残っている状態であると考えられる。近世後期以前の溝状遺構を除き遺構は検出できなかったが、他に遺構の形成があったかは確認できなかった。

検出した溝状遺構は４層から掘りこまれ、As-Aを含む３層により埋まっていた。覆土最下層の５層にはAs-Aが含まれないことから、江戸時代後期以前に掘られたと考えられる。

②トレンチ２（行田市大字渡柳1394）（図５）

現在の標高は18.3ｍ前後であり、トレンチ１、トレンチ５、６と比べて１ｍほど高くなっている。そのため、ほかの地点では削平されてしまったレベルの遺構が残存している可能性を考え、この地点にトレンチを設定した。平面は長方形を基本とし、東端において溝の延伸方向を確認するために拡張を行った。トレンチは、幅0.5ｍ（拡張部3.5ｍ）、長さ38.0ｍ、深さ約0.2～1.0ｍで、調査面積は29.5㎡である。

東側では表土層から0.2ｍほど掘り下げたところでハードロームに到達するが、西に向かうにつれてハードローム上面は深くなり、西端では約1.0ｍとなっている。これはトレンチ１と同じ傾向である。トレンチ西側では、ハードロームの上層にソフトローム（９層）、FAと考えられる火山灰を含む層（８層）を検出した。これらの層も同様に西側ほど検出面が深くなることから、現状はほぼ高低差がないが、古墳時代には東から西に向けて緩やかに落ち込んでいく地形であったことが確認できた。８層と９層はトレンチの中ほどから東側では見られなくなる。８層以上が古墳時代以降の層位となり、２層の下端が平坦であることから２層の堆積以前に削平されたものと考えられる。

遺構は、トレンチの東端で幅２ｍほどの溝、西側では幅20㎝前後の小規模な溝群を確認した。東端の溝は上層が削平されており本来の掘り込み面が確認できないが、残存部の深さは約0.9

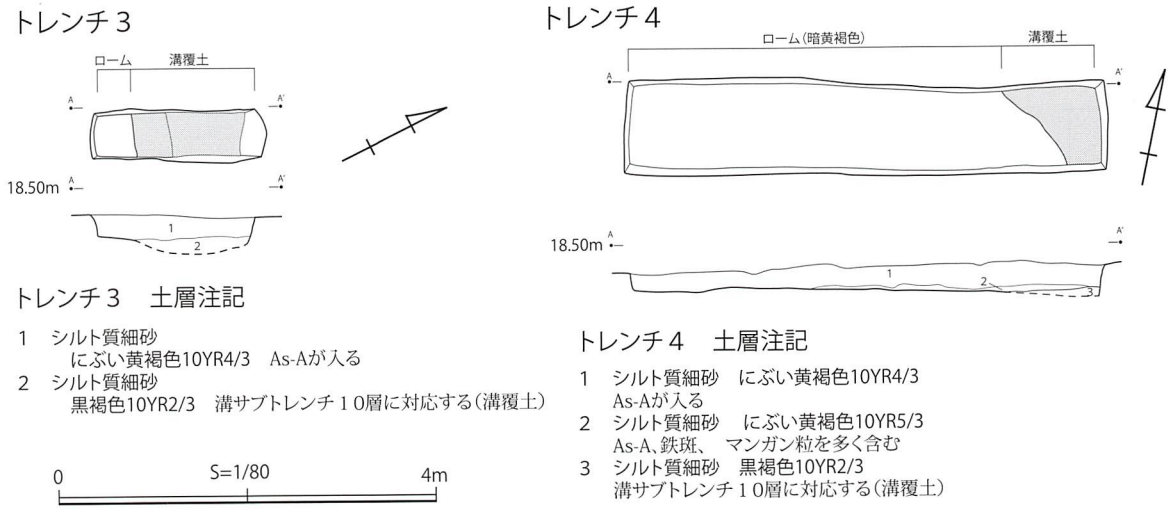


図６　トレンチ３・４　断面図・平面図

mである。上幅が約2.5m、底面の幅が1.3mであり、断面形は箱形になる。覆土は黒褐色土が主で、断面の土層からは、16・17層上面、14層上面の２回程度掘りなおされていると考えられる。覆土内から遺物は出土しなかった。

埼玉古墳群における堆積物の色調は褐色を主体としており、隣接する奥の山古墳の調査では、黒色や黒褐色の有機質土壌の堆積は、古墳時代の旧表土や、周堀覆土のAs-Bを含む層より下層までに限定されることを確認した（佐藤2014）。ここから溝は古墳時代から古代のものであると考えられ、未知の古墳の周堀である可能性もある。なお、南東方向に約10m離れた平成20年度調査のトレンチ18－２では、今回検出した溝のほぼ延長上で上幅３～４m、深さ0.9mの溝が検出されており、関係する可能性がある（図３）。

西側溝群は、トレンチ両側の壁面で確認した。幅20～50㎝、深さ20～30㎝程度の溝群で、全てFAを含む８層から掘り込まれ、As-Bを含む５層で埋まっている。溝は幅50㎝ほどの狭い間隔で連続し、西端の１条はこれに直交すると考えられる。熊谷市の北島遺跡などで報告されている古墳時代の畠跡に規模や形態が類似しており（吉田ほか2004）、畠などの耕作の痕跡の可能性がある。明確な年代を示す根拠はないが、火山灰の状況からは古墳時代から奈良・平安時代頃と考えられる。

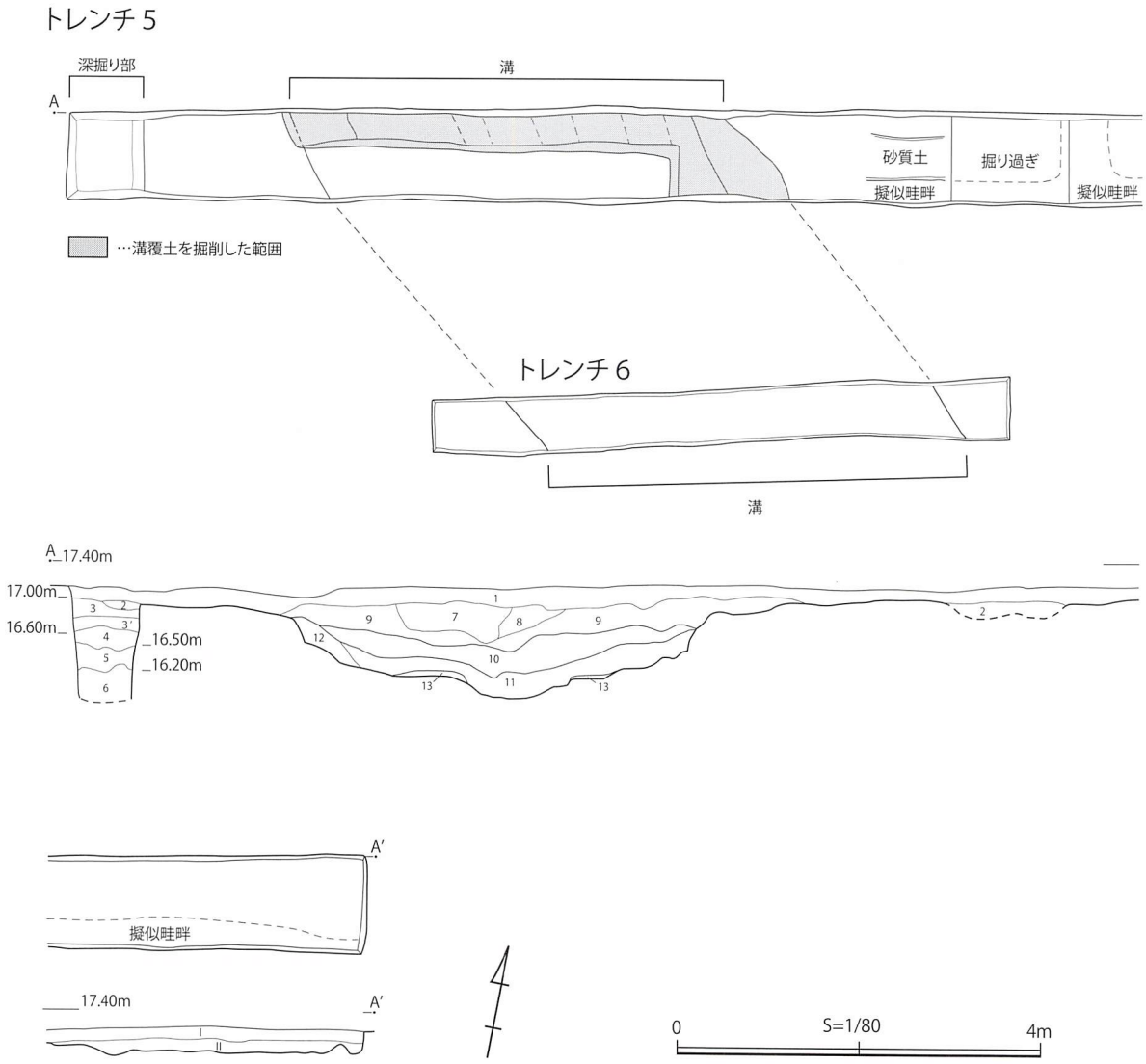
③トレンチ３（行田市大字渡柳1394）（図６）

トレンチ２の東側で検出した溝の方向を確認するために設定した。トレンチは平面長方形で、幅0.5m、長さ1.9m、溝覆土上面までの深さは約0.3mで、調査面積は1.0㎡である。

As-Aを含んだ表土層を除去すると、トレンチ２と同様にハードロームと溝の覆土の境界が確認できた。確認の際に覆土を一部掘削したが、覆土内からの遺物の出土はなかった。

④トレンチ４（行田市大字渡柳1394）（図６）

トレンチ３と同様、溝の方向を確認するために調査を行った。トレンチは平面長方形で、幅



トレンチ５　土層注記

1	シルト質細砂	にぶい黄褐色10YR4/3	As-Aを含む現代の水田耕作土　２層以下との境界が平坦であり、機械による削平と考えられる
2	シルト質細砂	にぶい黄褐色10YR5/3	As-A、上層から浸透したと思われる鉄斑・マンガン粒を含む
3	シルト質細砂	灰黄褐色10YR4/2	３'層よりマンガン粒多く、径1cm前後の結核が見られる　鉄斑も多く含み、上層からの浸透と考えられる
3'	シルト質細砂	灰黄褐色10YR4/2	鉄斑・マンガン粒をわずかに含む　３層を含め、立川ロームⅣ層に相当するか
4	細砂質シルト	暗褐色10YR3/3	全体の粒子は細かいが、粗い砂粒がわずかに含まれる　鉄斑含み、マンガン粒もわずかに含む 第１黒色帯に対応するか
5	シルト質細砂	暗褐色10YR3/4	粘性が強い粘土質のブロックを一部に含む　第２黒色帯に対応するか
6	シルト質細砂	にぶい黄褐色10YR4/3	他の層に比べ粒がやや粗く、シャリシャリとする　立川ロームⅩ層に相当するか
7	シルト質細砂	にぶい黄褐色10YR4/3	８層に比べ、砂が多く含まれる　マンガン粒多く含む　白色の粒（砂粒か）が含まれる 溝に最後に堆積した層
8	細砂質シルト	暗褐色10YR3/4	７層と同じく白色の粒が含まれ、ほぼ同時期の堆積と考えられる　マンガン粒を含む
9	細砂質シルト	黒褐色7.5YR3/1	８層から12層の他の層に比べ砂の含有が少ない　腐植土が混じる　層の上面には水田から 浸透したマンガン粒を含む　粘り気が強い
10	細砂質シルト	黒褐色10YR3/1	黒い筋や斑紋が入る　植物の根により、上層から鉄が浸透する　粘り気が強い ９層ないし10層が堆積する前に堀が掘りなおされている
11	細砂質シルト	褐灰色10YR4/1	５層に似た色調だが、砂がほとんど含まれない　粘り気が強い 最初に掘られた堀を掘りなおし、中央を深くしている
12	細砂質シルト	褐灰色10YR4/1	９・10層より砂が多く含まれる　10層と同じく根による攪乱がある 最初に掘られた堀の壁面から崩落し、堆積したものか
13	シルト質細砂	黒褐色10YR3/2	11層に切られている　黄褐色土（６層か）を含み、堀底に最初に堆積した層と考えられる。

図７　トレンチ５・６　断面図・平面図

1.0ｍ、長さ5.1ｍ、溝覆土上面までの深さは約0.3ｍで、調査面積は5.0㎡である。

表土層を除去したところ、トレンチ東端で溝の覆土を検出した。溝の方向はトレンチ２・３で検出されたものとおおむね揃っており、これにより溝は北西方向から南東方向に延びていることが判明した。遺物は出土しなかった。

⑤トレンチ５（行田市大字渡柳1416－１）（図７）

平成21年度のトレンチ５から、現在の用水路を隔てて東側に位置する。トレンチの形は平面長方形に設定した。幅1.0ｍ、長さ16.0ｍ、ローム層の３層までの深さは0.2ｍ前後で、現地表面の標高は17.1～17.2ｍである。また、地山の堆積の状況を確認するために、遺構が確認できなかった西端部分において深さ1.3ｍほどの深掘りを行った。

現代の水田耕作土であった１層を除去すると、トレンチ１と同様にAs-Aと鉄斑・マンガン粒を含み、還元され青味を呈する現代水田床土の２層となる。トレンチの東半ではこの層の直下がハードロームの３層であった。３層より上に本来堆積していたと思われる、ソフトロームから近世頃までの堆積土は認められなかった。昭和10年代に実施された耕地整理の際に削平されたと考えられる。

トレンチ東半の３層の上面には、鉄分とマンガン粒が特に多く沈着している範囲が見られた。そこで、鉄分があまり沈着していない範囲との境界を確認していくと、帯状の範囲になり、直角に分岐する部分も確認できた。鉄斑が面的に沈着した部分は、方形の区画をなしており、水田直下に鉄分が沈着したもので、鉄分が見られない帯状部分は畦畔下の土壌化していない部分と考えられ、仙台市富沢遺跡で検出された「擬似畦畔Ｂ」にあたる（斎野1997）。現代の水田の畦畔と一致しないことから、耕地整理の際に削平された近世から昭和初期の水田によるものと考えられる。

また、トレンチ中央西寄りでは溝を検出した。溝は幅4.6ｍ、深さ1.1ｍを測る。はじめ底面が幅2.5ｍ程度の平坦な溝として掘られており、その後最初の掘りなおしの時に底面中央部が一段深く掘りこまれている。次に掘りなおされている底面に近い10層、11層はいずれも非常に粘性が強く、最下層である13層には他の層に比べ砂粒がやや多く含まれる。

黒褐色土の10層が溝覆土の底面に近いところに堆積していることから、トレンチ２の東端溝と同様に、古墳時代から古代以前のものであると考えられる。

⑥トレンチ６（行田市大字渡柳1416－１）（図７）

トレンチ５の西側で確認された溝の延びる方向を確認するため、トレンチ５の南側に設定した。トレンチの形は平面長方形で、幅0.6ｍ、長さ6.4ｍ、調査面積は3.8㎡である。深さ約0.2ｍの表土を除去すると東西の両端付近で溝の覆土と地山の境が確認でき、トレンチ５での検出方向とおおむね一致することが分かった。溝の覆土はトレンチ５の７～９層、地山は３層に対応する。遺物は出土しなかった。

これにより、溝は北西方向から南東方向に延びることが確認できた。トレンチを設定した目的を達したため遺構覆土の掘削は行わず、平面図のみの記録とした。

（３）出土遺物

トレンチ１・２・５において、表土層を掘削した際に数点の遺物が出土した。観察にあたり、色調はマンセル系統分類方式による標準土色帖を用いて記録した。

①トレンチ１（図８－１～３）

１は須恵器坏の底部である。復元した底径は8.5㎝前後、残存高は1.0㎝を測り、底部外面には回転糸切り痕が残る。色調は灰色（7.5YR６／１）で、還元炎焼成である。胎土に白色針状物質を含み、南比企産と思われる。法量及び底部調整痕から、８世紀頃のものと考えられる。

２は鉄釉筒型香炉である。口径は10.4㎝を測る。鉄釉は全面に施されている。欠損のため全体の形状は不明である。近世の瀬戸製と考えられる。

３は素焼きの焙烙である。口径は小片であるため正確に復元できないが、30㎝～40㎝程度である。体部の下方に稜をもち、口縁部は丸みを帯びて体部よりやや厚く作られている。酸化炎焼成であり、橙色（7.5YR７／６）を呈する。体部から口縁部への立ち上がりの形状から、16世紀後半から17世紀初頭のものと考えられる（両角1996）。

②トレンチ２（図８－４）

４は須恵器坏の底部である。復元した底径は7.5㎝前後、残存高は0.85㎝を測る。底部の切り離しは回転糸切り後、全面を回転ヘラケズリしており、その後回転ヘラミガキが施される。白色針状物質を含み、南比企産と考えられる。色調は灰色（５YR６／１）で、還元炎焼成である。法量や底部調整痕から、８世紀頃のものと考えられる。

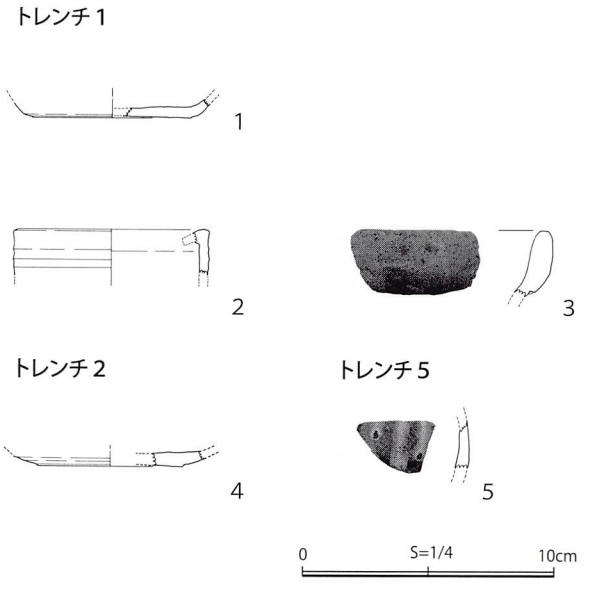


図８　出土遺物実測図

③トレンチ５（図８－５）

５は須恵器長頸瓶の破片である。外面にはロクロ目に直交した自然釉がみられ、釉流れによる釉溜まりが数か所生じている。丸みを帯びた体部の、肩部付近と考えられる。還元炎焼成で、色調は灰白色（7.5Y７／１）を呈する。胎土は極めて緻密でよく精製されており、東海系と考えられる。７世紀頃のものであろう。

４．確認調査のまとめ

（１）調査結果

今回の確認調査では、トレンチ２で古墳時代にさかのぼる可能性がある畠状の溝群と、古墳時代から古代と考えられる幅２ｍの溝を検出した。また、トレンチ５では古墳時代か

ら古代のものと思われる幅4.6mの溝に加え、7世紀代のものと思われる須恵器長頸瓶の破片を検出した。このことは、従来の確認調査では見つかっていなかった範囲にも、古墳などの遺構が存在する可能性を示している。

旧地形については、全てのトレンチで関東ローム層を検出したことから、従来考えていたとおり、奥の山古墳の西側で1m程度の緩い段差をもつものの、武蔵水路方面まで低い台地が連続していることを再確認した。

また、トレンチ2では古墳時代の堆積土の検出面が、ローム層と同様に西に向かって低くなっていくことを確認した。ここから、古墳時代にもトレンチ2の中央付近から西に向けて地形が低くなっていたことを推測できる。

（2）結　論

これまでの調査成果から、埼玉古墳群は台地上に広がる遺跡であり、周囲の湿地から一段高いところに位置することが明らかになった。このうち、大型古墳が築造される範囲は更に一段高い微高地上にあたる。そのため、現時点の史跡指定範囲に含まれる9基の大型古墳に加え、浅間山古墳、戸場口山古墳を加えた11基の大型古墳を含む範囲を、遺跡としての埼玉古墳群全体の中で特別な意味を持つ範囲と捉えることができる。

また、中核となる大型古墳の周辺と台地の低い面には中小の古墳が築造され、斜面や台地の低い面は農地としても利用されていたことも分かってきた。

ただし、今回の調査ではトレンチ5で出土した長頸瓶などから、史跡指定範囲の南西にも古墳や関連する遺構が存在する可能性が確認され、中の山古墳の南側に位置する原遺跡で行田市が行った調査では古墳と考えられる遺構が検出されるなど（中島・浅見2005）、遺跡としての埼玉古墳群の範囲は南東から南西にかけて広がる可能性が高い。

（3）課　題

調査の結果、古墳時代においては台地の高い面に古墳が築造され、斜面地や低い面は農地などに利用されていた可能性をうかがえる成果があった。しかし、未調査箇所が多く残されており、埼玉古墳群の遺跡としての性格、価値や詳細な状況を把握するためには今後も確認調査が必要である。

《参考文献》

行田市史編纂委員会　1964『行田市史　下巻』行田市
工楽　善通　1991『水田の考古学』東京大学出版会
斉藤　国夫　1979『野合遺跡・原第Ⅱ遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書　第5集　行田市教育委員会
斎野　裕彦　1987『富沢』仙台市文化財調査報告書　第98集　仙台市教育委員会
佐藤　康二　2011「平成21年度　埼玉古墳群周辺の確認調査報告」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第5号　埼玉県立史跡の博物館
佐藤　康二　2014『奥の山古墳　発掘調査・保存整備事業報告書』埼玉県教育委員会

杉崎　茂樹　2004　「埼玉古墳群出現当時の地理的景観について」『調査研究報告』　第17号　埼玉県立さきたま資料館

杉崎　茂樹　2006　「埼玉古墳群陣場地区所在古墳についての覚書」『調査研究報告』　第19号　埼玉県立さきたま資料館

中島洋一・浅見貴子　2005　『行田市市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ　原遺跡（９次）　八幡山古墳（４次）　船原・内郷通遺跡（12次）』　行田市文化財調査報告書　第35集　行田市教育委員会

西口　正純　2009　「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』　第３号　埼玉県立史跡の博物館

西口正純・佐藤康二　2010　「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』　第４号　埼玉県立史跡の博物館

能登　　健　1991　「畑作農耕」『古墳時代の研究４　生産と流通Ⅰ』　雄山閣

三土　正則　1976　「水田土壌」『アーバンクボタ』　13　株式会社クボタ

両角　まり　1996　「内耳鍋から焙烙へ－近世江戸在地系土器の成立－」『考古学研究』　42－４　考古学研究会

吉田　　稔ほか　2004　『北島遺跡Ⅶ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第291集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

写真１　トレンチ１　完掘状況

写真２　トレンチ２　完掘状況

写真３　トレンチ２　東端溝検出状況

写真４　トレンチ２　東端溝サブトレンチ

写真５　トレンチ２　西端溝群

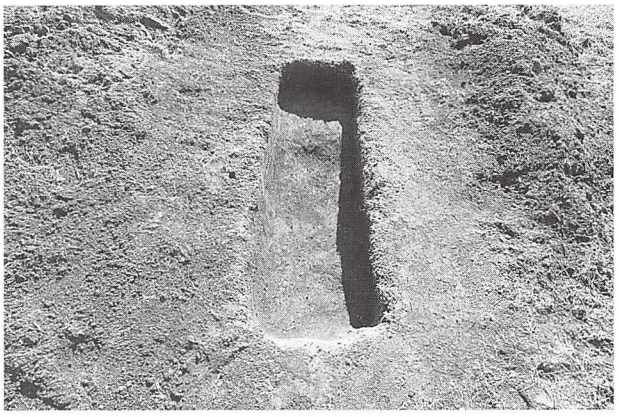


写真６　トレンチ３　完掘状況
（手前：溝覆土　奥：ローム）

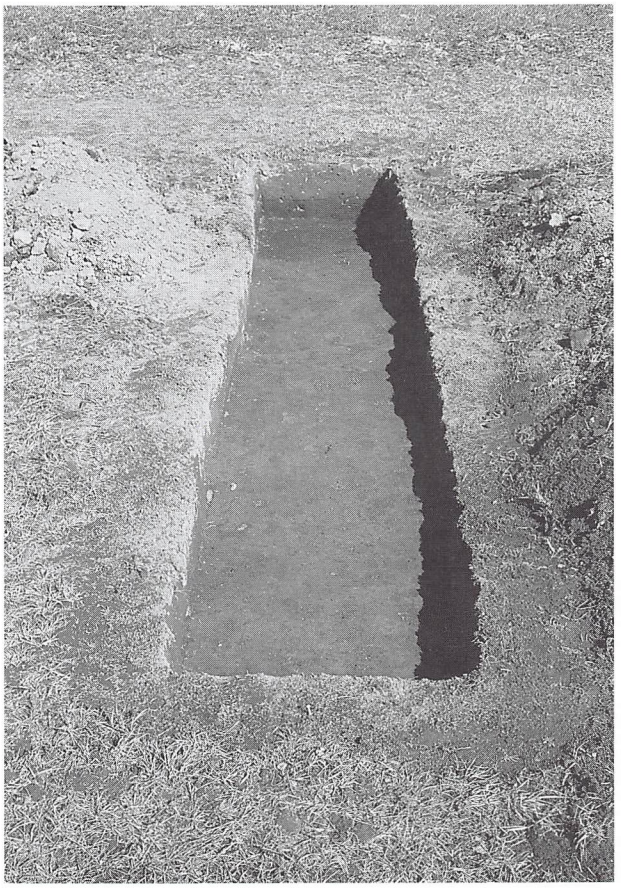


写真７　トレンチ４　完掘状況
（手前：ローム　奥：溝覆土）

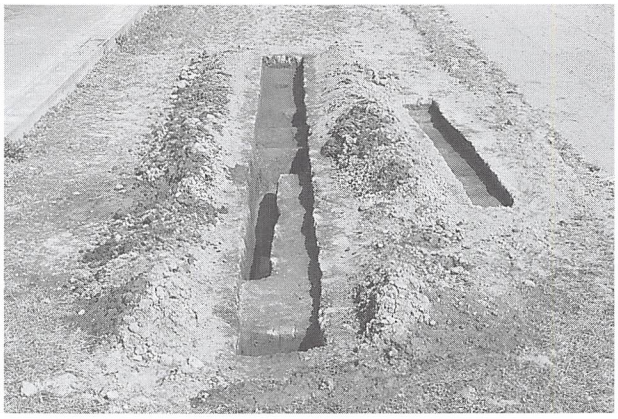


写真８　トレンチ５・６　完掘状況

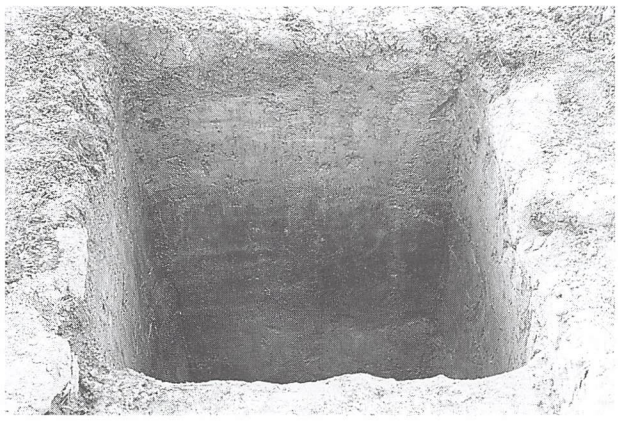


写真９　トレンチ５　深掘り部分

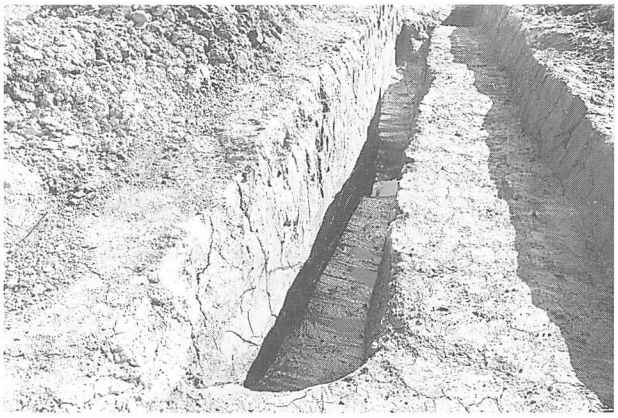


写真10　トレンチ５　溝

写真11　GPS測量の状況

写真12　作業風景

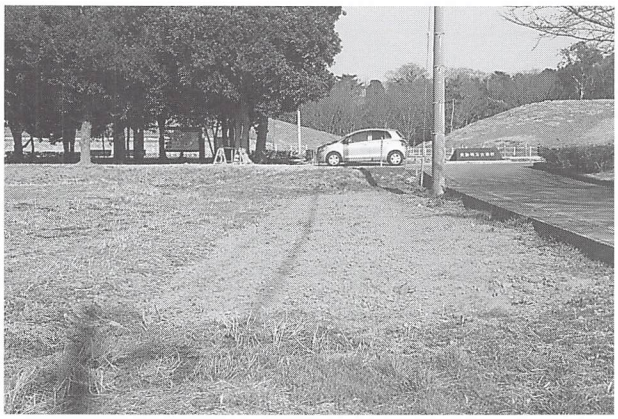


写真13　トレンチ１埋め戻し後

写真14　トレンチ２～４埋め戻し後

写真15　トレンチ５・６埋め戻し後